精神科訪問看護の現状と課題
― 地域での生活を支える仕組みとして ―

武田　弘美
河野　益美

はじめに

精神科長期入院患者の退院促進が行われている今日、訪問看護は、精神障がい者の地域生活を直接的に支援する制度として重要な役割を担う。今回、我々は県内の精神科訪問看護を実践している施設の現状を把握し、その機能と役割を明らかにすることを目的として質問紙による調査を行った。

1．調査方法・内容

平成19年1月～2月、県内にある訪問看護ステーション（以下、ステーションとする）のうち「訪問看護連絡協議会」に加盟している217か所を対象に、質問紙による郵送調査を行った（有効回答数は126件、回収率58.1%）。また、精神科訪問看護を実施している5施設について精神科訪問看護に関する質問紙を送付し、全施設から回答を得た。

2．調査結果

1）精神障がい者の訪問看護を「実施しているもしくは実施したことがある」と回答したステーションが78件（61.9%）、「現在は実施していないが実施可能である」と回答したステーションが17件（13.5%）である。精神科訪問看護を実施している5施設のうち4施設が病院併設型。いずれの施設も40代～50代の利用者が多く、疾患は統合失調症が最も多い。

2）精神科訪問看護を実施していて「困難な状況」としては、症状が悪化しても入院を拒否する、自己判断で服薬・通院を拒否する、暴力行為があり単独での訪問が困難、症状のために連絡がとれない、コミュニケーションが困難、利用者による訪問拒否、家族が疾患を受容できないため医療者に不信感を持ち生活全体を抱え込む、家族にも精神障がいを抱えている人がいるが対応できず利用者まで症状が悪化傾向にある、などである。

3）「訪問看護の効果を実感するとき」としては、利用者が再入院しないでいること、服薬が継続できるようになった、日常生活が普通に送れるようになったときなどといった内容が挙げられている。

4）「精神科訪問看護の役割」として、治療や服薬継続への援助、生活全般への援助、対人関係能力への援助、利用者だけでなく家族への援助といった項目が挙げられている。また、現状では看護師の負担が大きく行政も非協力的である、精神科訪問看護は専門性をもった看護師の訪問が望ましいとする意見もあった。

今回、精神科訪問看護の現状と、訪問を行う上での困難な状況が明らかになった。また、訪問看護が果たしている役割と訪問看護だけでは担いきれない部分についての意見を聴くことができた。今後は、精神科訪問看護機関と他職種や行政との連携の実態と問題点について明らかにしていき、精神障がい者への訪問看護を行う意義について個々の事例を通して検討を加えたい。